

# オンライン型哲学カフェ「寺子屋」の実践と効果

A Study of Online Philosophical Café "TERAKOYA"

寺田 篤史

中嶋 克成

キーワード：哲学カフェ Withコロナ 三層のカリキュラム

筆者らは徳山大学において2019年より哲学カフェ「寺子屋」を開催している。この「寺子屋」は「参加者の哲学的な思索を深める場」であると同時に「大学人と学生および地域とを結びつける出会いの場」として、新たな地域連携のきっかけとなった。しかしながら新型コロナウイルス感染拡大防止の観点から、徳山大学では4月より「学外者との対面」が全面的に禁止となった。そこで今年度は、「寺子屋」のコンセプトをについて維持しつつ、対話の場を「オンライン」に移した「オンライン型哲学カフェ『寺子屋』」を実施した。本発表では当該実践を「三層のカリキュラム」、特に「意図されたカリキュラム」「実施されたカリキュラム」の観点から概観する。

## 1. はじめに

筆者らは2019年10月より哲学カフェ「寺子屋」と名付けた対話の場を設け、地域経済人を交えて学生と教員が一つのテーマについて思索を深める会を催してきた（その特徴や第1回の詳細については寺田・中嶋（2020）で紹介している [1]）。しかし、冬からの新型コロナウイルス感染症の拡大のため2020年2月の実施を最後に休止状態となっていた。その後、年度が明けて全面オンライン化した授

業に慣れてきた6月5日に、オンライン会議システムを用いてごく少人数による「寺子屋」をリモートで再開した。オンライン会議システムを援用した「寺子屋」開催は本稿執筆時の10月まで継続している。

本稿では、この取組みをオンラインで実施するにあたって、それが本来対面で開催していた時と「同様の取組みとなったか？」を問う。この問いを考える際の道具として教育学における「三層のカリキュラム」という枠組みを援用し、「寺子屋」の取組を「意図の層」「実施の層」「達成の層」の三層に整理する観点をを用いる。

本稿の道行きは以下のとおりである。まず、本研究の分析のひな型となる「三層のカリキュラム」を説明し、これまで対面で実施してきた哲学カフェ「寺子屋」の取組みを振り返り「意図の層」として取り出す。つづいて、6月に再開したオンライン型「寺子屋」を「実施の層」としてその実施状況を説明するとともに、「意図の層」との一致・ズレを確認する。さらに、学生へのインタビューをもとに「達成の層」を抽出し、こちらも「意図の層」「実施の層」との一致・ズレを確認する。これをもって、オンライン型「寺子屋」を評価し、「寺子屋」という取組ひいては一般に「哲学カフェ」という取組をオンラインで実施する際の妥当性や問題点を明らかにしたい。

## 2. 三層の視点

「三層のカリキュラム」(Travers & Westbury, 1989) [2]とは、カリキュラムを①意図されたカリキュラム、②実施されたカリキュラム、③達成されたカリキュラムの三層に大別し、この三層の整合性を確認することで教育を考察するモデルである。例えば、「学習指導要領」は政策レベルで目指されている「意図されたカリキュラム」であり、教室で行われていることや個々の教師の教育活動は「実施されたカリキュラム」であり、そのもつで実際に子供が身につけた成果が「達成されたカリキュラム」となる。これらを相互に比較することによりカリキュラム改善を行うための道具が「三層のカリキュラム」である。

本研究ではこの枠組みをいわば比喩的に用いて、哲学カフェ「寺子屋」という取組を「意図の層」「実施の層」「達成の層」の三層へと整理する。すなわち、本来対面での実施を想定して構想された哲学カフェ「寺子屋」は「意図の層」に相当する。また、コロナ禍を受けてオンラインで再開した「寺子屋」は「実施の層」ととらえられる。そして、オンライン型「寺子屋」で参加者が結果として何を得心かが「達成の層」として与えられる。この枠組みの下で、「寺子屋」の意図の層を基準としてオンライン型「寺子屋」(実施の層)を評価する。

## 3. 意図の層—対面開催していた

### 哲学カフェ寺子屋

筆者らが運営する「寺子屋」は、哲学カフェという枕詞をつけているがいわゆる「哲学カフェ」としては不純な取組である(その不純性については森本(2013) [3]をもとにすでに論じた [1])。本来、哲学カフェは「参加者が純粋に哲学的な思索を深める場」である。そ

のために参加者は平等であることが求められ、参加者の社会的地位や顔見知りの参加者同士の親密さから生じる上下関係や疎外感を防ぐために自己紹介をしないことが推奨される。また、専門知識も求められず、参加者は互いに教師でも生徒でもなく、平等である。また、必ずしも思索は発言によってのみ深められるものではなく、周囲の発言を黙って検討することによって思索が深まることもある。それゆえ、参加者は発言や参加を強要されない。また、参加や退場も自由である。

これに対して、「寺子屋」は「参加者の哲学的な思索を深める場」という大目的と参加・退場の自由という形式的自由という共通点を除いては、本来の哲学カフェとは意図的に一線を画している。その主要な理由は、「寺子屋」が「参加者の哲学的な思索を深める場」であると同時に「大学教員と学生および地域とを結びつける出会いの場」として構想されていることにある。

参加者の出会いの場であるために参加者は議論を自己紹介から始める。時に不平等である。また、教員の参加者は一個人の意見だけでなく、「〇〇学ではこう考える」といった専門的な知見を披露することを時に求められる。これは地域から参加していただく中小企業経営者を含む学外者に対しても同様である。また、学生には「学生として」の発言が求められることも許容している。専門的知識が現れた場合にはある種の「講義」が生じることもあり、そこでは参加者は教師・生徒の関係となりうる。

このような特徴の共通性と差異は表1のようにまとめられるだろう。

表1. 寺子屋と本来の哲学カフェの比較

哲学カフェ寺子屋	本来の哲学カフェ
参加者の哲学的な思索を深める場 かつ地域と大学をつなぐ場	参加者の哲学的な思索を深める場
参加者は時に不平等	参加者は平等
時に専門的知見を求める	専門知識は不要
時に発言を求める	発言・参加を強要されない
時に教授・学習の場となる	教師・生徒がない
参加も退場も自由	参加も退場も自由

この表1左側が、「意図の層」としての哲学カフェ「寺子屋」の特徴を表していると言えるだろう。それと同時に、「寺子屋」がいわゆる「哲学カフェ」からすると不純である点を示している。

こうして、「寺子屋」のコンセプトは「専門・立場からの発言を厭わず」「自由に一つのテーマについて議論し考えを深める」「地域と大学をつなぐ場」と表現することができる。この「寺子屋」において、参加者は自由な議論を通じてテーマに関する考えを深めるだけでなく、その共同での議論を通じて異なる立場の参加者である学生・教員・地域経済人が新たな人間関係を形成するつながりを作ることが期待されている。

また、これを通じて、学外者は「どんな学生・教員がいるのか」「学生や教員が何を考えているのか」を知り、「寺子屋」を離れた大学と地域のコラボレーションへとつながることが意図されている。学生については将来出ていく社会を動かしている人や、身近なはずの教員の意外な一面を知ること、キャリア意識形成や大学への順応に資することが期待される。教員にとっては、学生を送り出す先である地域の人々や当の学生について知ること、学外連携や学生指導の充実に資することが期待される。

こうした点が本取組みの意図の層である。

なお、2月までの「寺子屋」では活発な議論が行われるよう場を和ませるために、寺田による楽器演奏を行っていた。これは「音楽を聴きながらなどリラックスしたムードで」という本来の哲学カフェのありようを意識する中嶋の強い勧めによる。

## 4. 実施の層—オンライン開催の哲学カフェ寺子屋

### 4-1. 実施形態

ここから実際に行われたオンライン版「寺子屋」を概観する。オンラインで実施されたとはいえ、これまで対面で実施してきた「寺子屋」をオンライン会議システムという異なる形態で実施するという点であるから、「寺子屋」が目指すところはこれまでと変わることはない。それゆえ、オンライン版「寺子屋」にとって、これまでの対面での「寺子屋」は「意図の層」であるとみることができるし、それに対してオンライン型「寺子屋」という取組は「実施の層」とみることができる。

写真1. オンライン版第2回「病(やまい)」の様子



オンライン型「寺子屋」は次のような仕方で行われた。徳山大学は新型コロナウイルス感染拡大防止のために2020年度の授業開始を遅らせており、前期授業の開始はようやく5月半ばから、しかも全面オンラインでの実施であった。このオンラインでの授業再開のおよそ半月後にオンライン型「寺子屋」が再

開されることとなった。そのきっかけとして、学生の資格取得等を目指して昨年度より筆者らが定期的に開いていた「勉強会」を、授業開始に先立つ4月よりオンラインで再開していたことがある。そこではオンライン会議システムとしてZOOMやMicrosoft Teamsが試されていたが、最終的に学生の利便性を重視して授業で主に用いられているMicrosoft Teamsを用いた。<sup>1)</sup>

各実施日とテーマは表2のとおりである。

表2. 各回の実施日・テーマ・参加者数

	実施日	テーマ	参加人数
①	6月5日	対面授業のレゾンデートル	教2、学3、地1
②	7月17日	病（やまい）	教2、学3、地1
③	8月28日	旅（たび）	教2、学4、地1
④	9月3日	旅（たび）（続）	教2、学3、地4
⑤	10月6日	働くこと	教3、学1、地8

※教：教員、学：学生、地：地域経済人

※10/6は地域経済人のうち3名はオンライン参加

## 4-2. 内容

6月5日のオンライン初「寺子屋」(①)は前述の勉強会参加学生を中心に開催し、地域経済人についても筆者らに極近しい方のみの少数で実施された。7月17日および8月28日(②③)も同様の形で行われた。回を重ね、オンラインでの「寺子屋」開催の感触を十分に得て、9月3日の回(④)では地域経済人の参加数を増やして実施した。

その後、大学では後期授業が対面授業を基本とする方針のもとで9月下旬に開始された。10月6日の回(⑤)は後期授業開始後の開催となった。後期に入って前期に参加していた学生の空き時間が変わっており、参加される地域経済人との予定が合わず、学生参加は1名のみであった。先述のように徳山大学では

後期授業は対面授業が基本となっていた。これにあわせて「寺子屋」も対面を基本とし、学外参加者のうち希望した方がオンラインで参加するハイブリッド型の開催となった。ちなみにこの時オンラインでの参加者は12名中3名であった。

さて、実施の層として各回に共通する要素は以下のとおりである。会の初めに寺田がテーマの解題をし、参加者全員の自己紹介ののち、議論に入って行く。その際ある程度皆が議論に参加し発言者が偏りすぎぬように、ファシリテータとして寺田が指名して発言を求めた。これはオンラインでの発言タイミングが難しく、いたずらに時間が過ぎるのを防ぐためでもあった。最後に中嶋または寺田による総括を行う。このあたりは各回共通である。なお、議論に先立つ楽器演奏は行わなかった(⑤では実施)。

一方で、以下に述べる部分はその回その回の特徴を含むものであり、従って各回それぞれに異なる「実施の層」となる。

①「対面授業のレゾンデートル」では全面オンライン化した授業への学生の不安などをきっかけにして、そこからこれまで行われてきた対面授業の意味に迫った。参加者のほぼ全員が対面コミュニケーションを重視していた。一方で、ある種の発達障害をもつ人等にとっては授業が受けやすくなるなど、非対面コミュニケーションのよさ・利点も提示し、ファシリテータである寺田は学生が普段しない方向の考え方にも目を向け考えを深められるよう促した。

②「病（やまい）」では未だ止まぬコロナ禍を受けて、社会を揺り動かしている「病」とは何かを検討した。ここでは、参加者からコ

1) Zoomは米Zoom Video Communicationsが、Microsoft Teamsは米Microsoft Corporationがそれぞれ提供するウェブサービスである。

コロナ騒動を一種の社会病理（病んだ状態）と見る意見が出て、「病」を単に身体的病気としてでなく捉える可能性が模索された。寺田はこうした観点を深めるために社会構成主義的な観点など「社会と健康」についてとりうる視点を提示するよう努めた。

③「旅（たび）」では「GOTO」政策に絡めて「そうまでして守りたい旅行・観光とは何なのか」という問いをきっかけに「旅行・観光」について議論した。そこでは、概念として「旅行」と「旅」に違いがあるかなど旅の定義や本質に迫る議論に発展した。それを考えるにあたって、旅にとっての苦労や楽しみの持つ意味は何か、バーチャルな旅行は成立しうるのかといった問いが派生するなど、当初想定したよりも議論が深く広がる結果になった。そのため、次の回でも同じテーマを引き継ぐこととした。

ここまでの回はオンライン開催の実験の趣が強く、学外者の参加が少なめで、ほぼ同じ顔触れの学生が議論の中心となっていた。学生の方も議論の仕方そのものやオンライン形式での議論に慣れていったためか、回を追うごとに議論の広がり・深まりが増し、③ではもう少し検討を続けたいというような事態となった。

テーマを引き継いだ④では、前回③でどのような議論が行われたかを紹介したうえで、改めて仕切り直して始められた。この回は学生参加者はほぼ同じであったが、新たに学外から地域の経営者が参加された。議論では、旅の楽しみは目的地にあるのか目的地に向かう過程にあるのかということが話題の中心となった。この回の特徴は⑤とともにまとめる。

最後の⑤は、「働くこと」をテーマに前述のように実質的に対面で行われた。この回の特徴は実質的に対面であったこと、学外の企業

経営者が多数参加したこと、たまたま時間があつた教員が新たに加わつたこと、学生参加者が1名のみであったことである。テーマ設定も地域経済人が多数参加することが意識されてのものである。主として「何のための」労働かをめぐってオンライン参加者も含め活発な議論がなされたが、議論は余り深まらなかった。

その要因として次のことが考えられる。一つは、参加者が多く、「学生・教員と地域をつなげる」という意識からまんべんなく意見を拾おうとしたためと考えられる。もう一つは、④で予告したこととであるが、中小企業経営者が共通して持ちがちな特質によるため、と考えられる。この点はそれ自体が研究に値する事柄だと思われるが、予断として以下の特質を挙げておく。ひとつは、⑤において顕著だったのだが、「人に命じられるよりは自らや

徳山大学の先生と一緒に考えよう！  
てつがくカフェ  
寺子屋

6 テーマ  
「個性」  
ゲスト：杉岡茂典博士

哲学は知識ではなく「考える」ことです  
一緒に考えてみましょう

参加費無料

2020年3月3日(火) 14:30-16:00  
場所：徳山大学総合研究所 会議室 (図書館棟1F)  
参加費：500円(お茶代として)  
ファシリテーター：寺田篤史 (哲学、倫理学)

てつがくカフェ「寺子屋」は寺田をはじめとする徳山大学の教職員や学生たち、そして地域のみならず「1つのテーマについてじっくり考えたい」という思いから企画された交流の場です。

寺田篤史・中嶋克成 (窓口担当：中嶋)  
TEL: 080-2987-6580  
MAIL: tenaka\_aki@tekyu.ac.jp

写真2. てつがくカフェ「寺子屋」  
対面型第6回「個性」チラシ

りたいことをやりたい」という独立心が強く、テーマに対する意見が一様になりがちであることである。もう一つは、④にも共通していることなのだが、異なる意見が出たとしても自身が抱えている結論に十分満足しており「なぜそうした違いが生じるのか」「自分自身の考えがどういった価値観やものの見方に基づいているのか」といった方向へと問いを進めることへの重要性をあまり感じない傾向があることである。

## 5. 小括

ここまで、取組の「3つの層」に着目し、対面で実施された「寺子屋」を意図の層、オンラインによる「寺子屋」を実施の層として概観してきた。ここで、二つの層を比較しよう。

「寺子屋」のコンセプトの一つである「テーマに関する考えを深める」という点については、①～③については意図を実施につなげることができたと思われる。しかし、④・⑤においては十分に「考えを深める」ようには実施できなかった。これは「学生・教員と地域をつなげる」というもう一つのコンセプトを「まんべんなく発言を求める」ことで実施しようとしたことが大きい。また、寺田のファシリテートの未熟さもあるだろう。これについてはオンラインか否かというのは本質的な問題にはならず、「議論の時間」と「交流の時間」を分けるなどの工夫が可能であると考えられる。この点で、オンライン型「寺子屋」は「意図」を「実施」できる形態であったとある程度は言えるだろう。

もう一つのコンセプトである「地域と大学をつなぐ場」（しかも本来の哲学カフェにはない「寺子屋」独自の意図）を実施することは難しかった。この点は会議の終了とともに切斷されるオンラインと、終了後も懇談できる

対面実施との特徴の違いによると思われる。実際に、実質的に対面で行われた⑤では、参加した学生が地元企業への就職を意識しており、会の終了後に参加した経営者にインターンシップの実施を求める行動をとるなど、こちらの意図の実施については対面型の方が明確に有利であることが分かった。

## 6. 達成された層—参加者の得たもの

### 6-1. 分析方法

「意図の層」、「実施の層」に対して達成されたものとはいかなるものであったのだろうか。本発表では参加者全29人中達成された層29人中21人にインタビュー調査を行い、テキストマイニングによる分析を行った。

テキストマイニングにあたっては、フリーソフトウェアであるKH Coderを用いて分析した。分析の前処理として、誤字・脱字を修正し、語句ごとにひらがなと漢字の使用を統一した。また、意味が同じで標記が異なる語句を一つの語句に統一した。

### 倫理的配慮

なお、インタビュー対象者には、文書により調査の目的・方法を説明した。また、参加については、任意であり拒否権があること、協力の是非により不利益は一切生じないことを口頭で伝えた。さらに、いったん同意した場合でも、インタビュー対象者が不利益を受けることはなく、いつでも同意を撤回することができ、その場合、提供されたデータは廃棄され、それ以降はそれらの情報が研究のために用いられることはない旨も併せて伝え、調査対象者の同意を得た。

### 6-2. 結果

抽出語のうち、上位10位までは表3の通りである。

表3. 上位抽出語

	抽出語	品詞/活用	頻度
1	オンライン	名詞	18
2	課題	名詞	15
3	参加	サ変名詞	15
4	時間	副詞可能	15
5	受ける	動詞	14
6	家	名詞C	13
7	思う	動詞	12
8	自分	名詞	12
9	人	名詞C	12
10	悪い	形容詞	11

### 6-3. 考察

抽出語のうち1位である「オンライン」は多くの学生が意識しており、高い位置にあることはやはり意識として高いため最も抽出された回数が多かった。また、オンライン版「寺子屋」第1回「対面授業のレゾナードール」の際にも「オンラインの意義」や「課題」等について深く考えたため、抽出語第2位として「課題」もあがっているものと推測される。

これらの抽出語の共起ネットワーク分析を行ったのが図1の共起ネットワークである。

距離（共起関係 edge）はJaccard係数を指標として計測をし、jaccard係数上位の共起関係のみ図示している。共起関係 edge の強弱はedgeの濃淡とJaccard係数とで示している。

まず、「達成されたカリキュラム」「実施されたカリキュラム」とも同様の傾向が「見ら

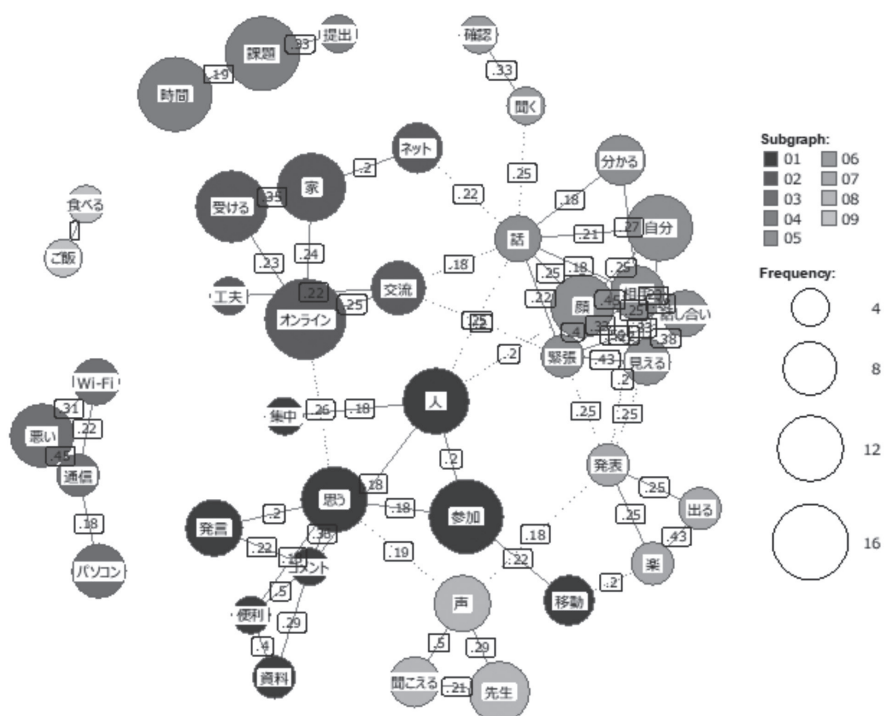


図1. 共起ネットワーク

れた部分から述べる。

頻出語のうち「オンライン」(18回)、「交流」(8回)は同じ文脈(Subgraph 2)で使用されていることが多く(Jaccard係数.25)、例えば「通信が悪くなってしまうのはどうしようもないと思うが、それでもオンラインのほうが交流はしやすいと思った」など、オンラインをむしろ肯定的にとらえているものもあった。その理由として、例えば、「Subgraph6」の「顔」(11回)と「緊張」(5回、edge.40)、「顔」と「相手」(8回、edge.45)のように「資料やメモを見ながら発表などができ、相手の顔が見えないので、緊張はさほどせずに説明がしっかりできる」、「相手の顔が見えないのでそこまで緊張することなく話し合いができた」など「オンライン」により、むしろ積極的に意見を言うことができたとする回答がみられた。オンライン版「寺子屋」では「顔」は基本的には表示する形で運営していたが、スマートフォンで参加する学生など、一部の参加者にとっては顔が見えないことはむしろプラスに働いていたようである。先にも述べたように「意図された層」でのいわゆる不純な意図である「大学教員と学生および地域とを結びつける出会いの場」としての意義は一部果たすことができていると思われる。

一方で「大学教員と学生および地域とを結びつける出会いの場」の意図を超える学生への「地域と大学をつなぐ場」の提供までは図ることができなかったのは今後のオンライン版「寺子屋」の課題である。対面交流が一部許可された後の10月6日寺子屋ではハイブリッド型で哲学カフェを実施し、参加した学生が参加した地元企業人の会社インターンシップに参加することができたことは対照的である。

## 7. 総括

以上のような課題もあるオンライン版「寺子屋」ではあるものの、コロナ禍での地域と大学の「対話」を通じたパイプとなったことは大きな成果といえる。最後にむすびにかえて、「寺子屋」の2つの意図から本取組を振り返っておきたい。

### 7-1. 「テーマに関する考えを深める」

「寺子屋」のコンセプトの一つである「テーマに関する考えを深める」という点については、オンラインであっても、各回による程度の差こそあれ、「意図」を「実施」につなげることができたと思われる。さらに参加者へのインタビューから「達成」されたものを確認したところ、「資料やメモを見ながら発表などができ、相手の顔が見えないので、緊張はさほどせずに説明がしっかりできる」など「オンライン」により、むしろ積極的に意見を言うことができたとする回答がみられた。したがって、「意図」を「実施」に、「実施」を「達成」につなげることができていたと言えるだろう。

### 7-2. 「地域と大学をつなぐ場」

もう一つのコンセプトである「地域と大学をつなぐ場」を実施することは難しかった。先にも述べたように、「哲学カフェ」終了とともに切断されるオンラインと、終了後も懇談できる対面実施との特徴の違いによると思われる。「意図」と「実施」が一部分断される結果となったため、「実施」と「達成」もつながらず、「意図」と「達成」もつながらなかった。

### 7-3. 本研究の限界と今後の展望

本研究はインタビュー対象者がまだ少なく、今後の本格分析まえの予備調査としての意義が強い。今後「寺子屋」実施ごとにデータを



蓄積していき、より詳細な調査・分析を進めていく必要があるだろう。

一方で、今後の「寺子屋」の運営に当たって重要なヒントを得ることもできた。7-2でも述べたように、本哲学カフェの「不純な」意図である「地域と大学をつなぐ場」の提供はうまく達成できなかったことは今後の「寺子屋」運営にあたっての大きな課題といえよう。withコロナの中での市民の対話の担保のため10月6日「寺子屋」時のハイブリッド型も含めた種々の形を試行していきたい。

※本報告は、2020年11月21日情報コミュニケーション学会第16回情報教育合同研究会において発表された「寺田篤史・中嶋克成(2020)『コロナ禍におけるオンライン型哲学カフェ「寺子屋」の実践(1)-意図されたカリキュラム・実施されたカリキュラム-』」「中嶋克成・寺田篤史(2020)『コロナ禍におけるオンライン型哲学カフェ「寺子屋」の実践(2)-達成されたカリキュラム-』」のために準備された内容を再構成し、新たに考察を加えたものである。

#### 参考文献

- [1]寺田篤史、中嶋克成(2020):対話の意義と可能性—徳山大学版哲学カフェ「寺子屋」の実践—。徳山大学総合研究所紀要,42,pp. 79-85.
- [2]Travers, K.J., & Westbury, I. (1989). The IEA Study of Mathematics I: Analysis of mathematics curricula. Oxford: Pergamon Press.
- [3]森本誠一(2013):公共的対話としての哲学カフェ。Humanitas,38, pp. 35-46.

